

動詞連用形＋ソーヤの音調にまつわる一考察

加藤 望

概要

中井(2002)及び加藤・中井(2009)にて報告されたアクセントのうち、動詞連用形に様態のソーヤ(高知ではソーヂャ)が付いたとされる形の音調は、些細ではあるが一つの疑問を提起している。本論ではこの問題について考察すると共に、同根の現象が他の語形にも現れている可能性について考える。

1. 連用形が2拍の2類動詞＋ソーヤに見られる高起の音調

現代京都語において、連用形を単体で言った時に低起の音調が現れる動詞は、1) 2拍5段2類動詞、2) 3拍1段2類動詞、3) 歩く・入る類、4) 抱える類、等である。このうち後ろ2つの類(しばしば第3類動詞とされるもの)は、活用または助動詞が付くことによって語形が変化しても低起であるのに対し、前2つの類、即ち「連用形が2拍の2類動詞(以下2-2動詞)」の場合、語形によっては高起の音調が現れる。例えば中井(2002)の“活用助詞.txt”に収録されている範囲で言うと、2-2動詞に否定のン、受身レル/ラレル、使役ス/サス、希望タイ、様態ソーヤが付いた時の形に、そのような高起の例が見出される(註1)。

連用形が2拍以上の2類動詞の場合、少なくとも院政期～鎌倉時代頃にはどの語形も低起の音調で発音されていたのであるから(註2)、今日一部の語形に現れる高起の音調は、何らかの理由によって後に低起の音調から遷移したものであるということになる。そしてその「何らか」に当たる事象としてもっともよく知られているのが、南北朝期に起こったとされるアクセントの体系変化である。

先述の2-2動詞に現れる高起例のうち、否定のンが付いた形、意向のウ/ヨウが付いた形、受身の形、使役の形は、いずれも未然形特殊とされるものにそれぞれ助動詞が付いて出来た形であるが、2-2動詞の未然形特殊の音調は古くはLL型であったとされ、これはまさしく体系変化の際に高起へ転じる条件、「語頭から2拍以上低い拍が続く」を満たすものであった。従ってこの未然形の群に今日現れる高起の音調は、体系変化の名残と見るのが自然であろう。

また希望の～タイの形に関しても、同様に体系変化の名残と見て差し支えはなさそうである。～タイの前身・～タンが助動詞として成立したのは鎌倉時代頃と言われ、先の未然形の群に比べるとかなり新しい表現と言える。そのせいもあって古い時代のアクセント資料に恵まれず、アクセントの変遷もあまりはっきりとは分かっていない語であるが、「体系変化の頃には既に存在していた」という点さえ揺るがぬ限りは、～タイのアクセントに体系変化の影響らしきものが見出されたとしても不自然ではないはずである。

残るは様態の～ソーヤである。前身である～ソーナという表現が成立した時期については、どの辞典も中世後期ないし室町時代末期と説明している。となるとこの語に関しては高起式の音調が現れる原因を、南北朝期の出来事と推定されている体系変化に求めることはできない。

しかし、それではなぜ体系変化の影響を受けたはずがない語形に、体系変化を経たかのごとき音調が現れているのであろうか。

1.1. 果たして本当に連用形か

現代京都語で様態を表すソーヤが付くのは、動詞の連用形・形容詞の語幹・形容動詞の語幹などであるが、かつてはこの他にも体言に直接付いたり、動詞の連体形に付いたりすることもあったという。形容動詞はその位置づけを巡って国文法の世界でも色々と言われている概念であるが、少なくともアクセントの観点からは、体言に断定の助動詞を添えただけのものと何ら変わらない。また動詞の連体形にしても、かつては体言と同じように使われることがあったという。こうしたことを踏まえると、元々ソーナとは体言及びそれに類するものに付くのが本則であった、というふうに考えられないだろうか(註3)。

もしそうであれば、先に「動詞の連用形」としたのも、実は「動詞の連用形から派生した転成名詞」であった可能性が出てく

る。2-2 動詞から派生した名詞の音調は、2 拍体言 3 類相当になるのが原則であるから、体系変化後は HL 型となるのが基本である。もし～ソーナという表現が成立した時代の人々が、「読みそうな」のごとき形を、{2 拍体言 3 類} + {様態を表すソー} + {断定の助動詞} から成り立っていると認識していたのであれば、件の現象に対しては「式保存の法則ならびに 2 拍 3 類体言を前部要素とする複合名詞からの類推などが作用し、『読みそう』の部分は高起で発音されるようになった」という説明を与えることが可能となるろう。

現代語では、動詞によって転成名詞の名詞としての定着度のようなものに差がある。例えば「泳ぎ・考え」のようなものは日常会話の中でも「泳ぎが上手い」「考えがある」のように使われうるが、「置き・食べ」のようなものになると、それ単体で名詞として使われる機会はほとんどないように思われる。しかし少なくとも中世の終わり、～ソーナという表現が確立される頃までは、今より転成名詞の用法が広く、また動詞とも強く結びついていてそれこそ活用形の一つのごとく使われていたということ、このソーナの音調を巡る問題は教え示しているのではなかろうか。

2. ながらとがてら

前章の結論を踏まえ、これまで動詞の連用形と目されてきたものの中に、他にも名詞形であった可能性の疑われるものがないかについて考える。

連用形に付く付属語のうち、2-2 動詞に付くと動詞部分が高起になるのは、現代京都語では先述のタイとソーナの 2 語だけのものである。しかし近世京都語ではナガラもそうであったらしく、上野和昭氏による「平曲索引（上野 2000 及び上野 2001。以下同様）」には、2-2 動詞+ナガラの施譜例として次のようなものが載っている（註 4）。

有りながら（コ××××：口説 6 例）	生きながら（上××××：白声 1 例、但し×上××××：口説 3 例）
うけながら（上コ××××：口説 1 例）	立ちながら（上コ××××/上上××××：口説 1 例ずつ）
つけながら（上上××××：素声 1 例）	臥しながら（上コ××××：口説 1 例）

思えばこのナガラも近世のソーナ同様、体言にも動詞の連用形にも付くとされている語である。かつて同じような付き方をしていた付属語同士に似たような音声上の現象が見られるとなると、このナガラのほうも元は「動詞の連用形から派生した名詞を含む体言」に付くのが本則であった可能性が出てくる（註 5・註 6）。

似た付き方をするという点ではガテラも候補に挙げられよう。～ガテラの音調に関しては、古今和歌集声点本のもものが秋永一枝氏によってまとめられていて、秋永氏はそこでガテラについて「連用形特殊形につく」と述べていられる（秋永 1991:p. 190）。ただ秋永（1980:p. 93）にもある通り、この時代の派生名詞のアクセントは特殊形のそれとほぼ一致するのであるから、先の言葉は「派生名詞につく」と言い換えることも実は可能ということになるのではなかろうか。

さらにもう一步踏み込んで言うと、もし真に前章の結論通り、派生名詞なるものが今よりも動詞と密接な関係にあったとすれば、連用形特殊と名詞形とは本質的には同じものであった可能性も浮上してこよう。つまり動詞に対応する名詞に接尾辞が付き、全体で一語のごとき音調をなすよう均されたものの前部だけを取りだしたのが、従来連用形特殊とされてきたものなのではあるまいか。もしそうであるとすれば、これまで連用形特殊に付くとされてきたタイや過去のシなども、名詞形に付いていたものの候補に含まれるということになるろう。

註 1：高知・徳島・京都市中川・滋賀県野洲などではここに挙げた形に加え、動詞に意向のウ/ヨウが付いた形にも高起が表れている（中井 2002）。

註 2：築島(1954)、金田一(2005)、秋永(1991)等参照。

註3： さらに中井幸比古氏より、1 拍形容詞にソーヤが付くとナサ/ヨサ+ソーヤのようにサが挿入されて形容詞部分が体言化される点をご指摘いただいた。氏は筆者とは別に、筆者が本章で述べたのと同様の結論に到達されていた。

註4： 調査方法は『方言・音声研究』第1号掲載の拙稿と同じ。

註5： 特にナガラの場合は前掲の平曲索引から引いた例のうち、「有りながら」の全例と「生きながら」の全4例中1例とに、2-2動詞からの転成名詞にそのままナガラが続いた HLLL というアクセントを反映していると思しき譜が見られる点、注目される。

その音調が現れる動詞の種類の数という点では HLLL 型のほうに分があるから、こちらの音調のほうが恐らく近世京都語では支配的だったのだろう。ただ、「有る」という使用頻度の高い動詞にナガラが付いたものには、徹底して HLLL 型が反映されていると思しき譜が施されているという事実は、この HLLL 型のほうが伝統的な音調であったことを示唆しているのではなかろうか。このことは、秋永(1991:p.164)の『「ながら」』は、一般的な助詞の接続から次第に接尾辞(的)接続へと変化していったようだ」という見解とも合致するように思われる。

註6： 「生きながら」の全4例中の3例には、LHLL 型を反映していると思しき譜が施されている。これは2-2動詞の連用形一般のほうの音調が反映されていると考えられる例で、動詞から派生した名詞の位置付けが、中世後期風のそれから現代風のそれへと移ろいつつあった状況を捉えたものかもしれない。

参考文献

- 秋永一枝 (1980) 『古今和歌集声点本の研究・研究篇上』校倉書房
秋永一枝 (1991) 『古今和歌集声点本の研究・研究篇下』校倉書房
上野和昭 (2000) 『平家正節声譜付語彙索引 上』アクセント史資料研究会
上野和昭 (2001) 『平家正節声譜付語彙索引 下』アクセント史資料研究会
加藤望・中井幸比古(2009) 「高知市方言・徳島市南部方言における動詞活用形アクセント資料」『方言・音声研究』第3号
金田一春彦(2005) 「四座講式の研究」『金田一春彦著作集 第五巻』玉川大学出版部 (もとは1964年に三省堂より刊行)
築島裕 (1954) 「浄辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」『国語アクセント論叢』法政大學出版局
中井幸比古(2002) 『京阪系アクセント辞典データ CD-ROM』勉誠出版